

The Whisper from Amherst

～エミリーのささやき～

エミリーの恋愛事情がなぞに包まれているゆえに、さまざまな憶測を呼んでいる理由の1つは、彼女が^{マスター}Masterと呼んでいた誰かに宛てた手紙です。これらは署名もない草稿であって、実際に送られたものはそう多くありません。いくらか推敲された跡はありますが、エミリーの心情の乱れが表れていて、ほとんど日記の走り書きに近いものようです。

マスターのひとりと推測されている^{サミュエル ボウルズ}Samuel Bowles氏はジャーナリスト、作家、社会改革者で、兄のオースティンを通しての知り合いでした。現存するボウルズ宛ての50通の手紙のうち、16通は妻のメアリーに宛てたものですが、ほとんどのものは、エミリーが遠慮がちに、しばしば茶目っ気たっぷりに、あるいは熱烈にそして巧妙な比喩表現などを用いて書かれたものです。また、残存しているものよりも紛失した手紙のほうがはるかに大量であるとも言われています。しかし何事にも詩的誇張を加える傾向のあるエミリーの手紙や添えられた詩を理解してもらうことはかなわず、次第にわだかまりを感じるようになります。それでも批評家たちは、エミリーは1870年代初期まではボウルズに恋していた、という仮説を立てています。

オヴ オール ザ サウンズ ディスパチトゥー アブロードゥ 'Of all the Sounds dispatched abroad'

Of all the Sounds dispatched abroad

そとに発信される音のうちで

ゼアーズ ナトゥー ア チャージ トゥ ミー
There's not a Charge to me

あの梢のなつかしい調べほど

ライク ザトゥー オールドゥ メイジャー イン ザ バウズ
Like that old measure in the Boughs-

強烈な力はありません

ザ ッ フレイズレス メロディ
That phraseless Melody-

あの言葉のないメロディー

ザ ウィン ダズ ワーキング ライカ ハンドゥ
The Wind does-working like a Hand,

風が手のように動いて

フーズ フィンガーズ コム ザ スカイ
Whose fingers Comb the Sky-

その指が空を梳きます

ゼン クワイヴァー ダウン ウィズ タフツ オヴ チューン
Then quiver down-with tufts of Tune- それから神々とわたしだけに許された

パーミテイドウ ゴーズ エン ミー
Permitted Gods, and me- 房のような曲を震わせてよこします

イン ヘリタンス イトゥ イズ トゥ アス
Inheritance, it is, to us- それは芸術では習得できない

ビヤン ディー アー トゥ アーン
Beyond the Art to Earn まったくの遺産で

ビヤン ザ トゥレイ トゥ テイク アウエイ
Beyond the trait to take away 泥棒にも 盗めない代物です

バイ ウロバー スィンス ザ ゲイン
By Robber, since the Gain なぜならそれは

イズ ゴトゥン ナトゥ オヴ フィンガーズ
Is gotten not of fingers- 指では握めずに

エン イナー ザン ザ ボーン
And inner than the Bone 骨よりずっと奥に

ヒズ ゴウルデン フォー ザ ホウル オヴ デイズ
His golden, for the whole of Days, 幾日も大切にかくされています

エン イーヴン イン ザ アーン
And even in the Urn, ときには骨壺の中でさえ

アイ キャナトゥ ヴァウチ ザ メウリー ダストゥ
I cannot vouch the merry Dust 陽気な塵が起き上がって

ドゥ ノトゥ アウライズ エン プレイ
Do not arise and play ある古風な休日に

イン サム オッド ファッション オヴ イツ オウン
In some odd fashion of it's own- その奇妙な恰好で戯れないとは

サム クウェインター ホリディ
Some quainter Holiday, 言えません

ウェン ウィンズ ゴウ ウラウン デン ウラウン イン バンズ
When Winds go round and round in Bands- 風が隊列をつくってぐるぐるめぐり

エン スラム アボン ザ ドーア
And thrum upon the door, ドアを敲いたり

エン バーズ テイク プレイスィズ オウヴァーヘッドゥ
And Birds take places, overhead, 頭上に鳥が集まって

トゥ ベアー ゼム オウケストゥラ
To bear them Orchestra. オーケストラを奏でるときは

アイ クレイヴ ヒム グレイス オヴ サ マ ー バ ウ ズ

I crave Him grace of Summer Boughs, ぜひ夏の梢の恵みを

聞かせてやりたい

イフ サッチ アン アウトウキャストゥ ビー

If such an Outcast be-

あの肉体のない詠唱が

フ ー ネヴァー ハードゥ ザアトウ フレッシュユレス チャントウ

Who never heard that fleshless Chant- おごそかに湧き上がるのを

ライズ ソ ル ム オン ザ トゥリー

Rise-solemn-on the Tree,

いちどもまだ聞かない世捨て人がいたらー

アズ イフ サ ム キャラヴァン オヴ サウンドゥ

As if some Caravan of Sound

まるで空の遠くの砂漠にいる

オフ デザ ーツ イン ザ スカイ

Off Deserts, in the Sky,

音の隊商のように

ハドゥ パーティドゥ ウランク

Had parted Rank,

隊列を解いては

ゼ ン ニットゥ エン スウェプトゥ

Then knit, and swept-

また組んでー

イン スィームレス カンパニー

In Seamless Company-

縫い目のない一隊となって流れていきます

※ phraseless =phrase less(2単語)

(大修館書店「エミリー・ディキンソン 不在の肖像」新倉 俊一 より)

エミリイは 20 篇近い詩をボウルズに送りましたが、ボウルズが編集長を務めていた^{スプリングフィールド}‘Springfield

リパブリカン

Republican’ 紙に載せたのはほんの数篇でした。

自分の詩が正しく評価されなかったと解釈したエミリイは、ディキンソン家が 30 年近く購読していた

ティ アトランティック マンスリー

‘The Atlantic Monthly’ という文学、科学、芸術および政治についての雑誌の寄稿者のひとり

トーマス ウェントウワース ヒギンソン

Thomas Wentworth Higginson に詩の評価を仰ぎました。エミリイの詩に初めて出会ったときのことを

ヒギンソンは後年「まったく新しい独創的な詩才だという印象は、これら4篇(J216、J318、J319、J320)の詩を初めて詠んだ時も、半世紀の付き合いの現在と同様に、あざやかにわたしの心に残っ

ている。これほどすばらしく、しかもこれほど批評しにくいものに、いったい文学の上でどういう地位を与えたいか、という今だに解決できない問題がそれ以来生じた」と述べています。この戸惑いは彼ひとりのものではなく、当時の人々が共有する困惑でした。

ヒギンソンからも期待どおりの評価が得られなかったと解釈したエミリィは、言葉を吟味することには異論はないけれども、新鮮な思考を既成の衣装に合わせて裁断する気は毛頭ないという意を込めて作り、送った詩がこの詩です。前よりもさらに大胆に韻律の規則を無視した自由詩で、彼女の自立の宣言と解釈しても過言ではないでしょう。ヒギンソンの困惑は深まる一方でした。

Nellie's Mom



エミリィの筆跡



エミリィの生家と庭木立



ヒギンソンに宛てた封書